

氏名(本籍)	佐々木 冠 (宮城県)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博乙第1,479号
学位授与年月日	平成11年2月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	水海道方言における格の範疇
主査	筑波大学教授 Ph.D. 中 右 実
副査	筑波大学教授 城 生 伯太郎
副査	筑波大学助教授 博士(文学) 三 谷 恵 子
副査	筑波大学助教授 矢 澤 真 人
副査	京都橘女子大学教授 博士(文学) 宮 島 達 夫

論文の内容の要旨

本論文は、茨城県南西部で話されている水海道方言について、その格体系の全体像を明らかにしたもので、とりわけ格形式の統語論的性質を記述し分析したうえで、その一般言語学的意味合いを追求したものである。

本論文の構成は以下のとおりである。

- 第1章 序 論
- 第2章 音韻論と形態論の概観
- 第3章 連体修飾格
- 第4章 有生対格と無生対格の統語論
- 第5章 文法的斜格と格の範疇
- 第6章 水海道方言における格の範疇
- 第7章 結 論
- 参考文献

第1章では、日本語の方言研究の現状および方言研究における統語論的研究の意義を論じたうえで、本論文の目標と主張を明らかにし、本論文の構成と全体的な議論の見通しを概観している。

第2章では、本論文の主要なテーマである格形式を記述するうえで最低限必要となる水海道方言の音韻論的特徴を概観する。水海道方言は、茨城県の他の地域の方言と音韻論的には、共通した性質を有するのに対し、格形式という形態論的側面においては、著しく異なる特徴を有している点が指摘される。

第3章では、この方言における連体修飾格の用法を記述し、連体修飾構造における格の範疇の一般化を行う。これを通して、ある格が連体修飾格であるか否かが、この方言の格の範疇を考える上で極めて重要な区別であること、および連体修飾構造においても文法格と意味格の区別があることが明らかにされる。

第4章では、二重対格構文の記述を通して、対格が二つあるという形態論的特徴が統語論に及ぼす影響を明らかにする。また、水海道方言の文法格の分類には、分布格(distributive case)と形式格(formal case)の二つの観点が必要であることが論証される。とりわけ、水海道方言では申し分のない二重対格構文が標準日本語では不可能である理由が突き詰められ、それが対格を表すのに二つの異なる対格形式があるか否かという形態論差異に帰着することが豊富な用例によって実証される。

第5章では、水海道方言における四つの斜格の用法が解明され、それに基づき連用修飾構造における格の体系

が論じられる。水海道方言では、標準語で「に」格が用いられるところで四つの斜格が使い分けられる。具体的には、経験者格、有生与格、無生与格、位格であるが、これらの斜格についてとりわけ次の点が明らかにされる。

第一に、経験者格名詞句は、主格名詞句と共通する統語的性質を有すること。そして両者はともに主語性をもつ要素として分類できること。

第二に、与格名詞句は、対格と共通する統語的性質を有すること。そして両者はともに目的語性をもつ要素として分類できること。

第三に、水海道方言の格体系は、有生格では格の範疇に関する素性の対立がすべて形式に反映するのに対し、無生名詞句では、直接格と斜格を問わず、主語・目的語の区別が形式に反映されない体系であること。

第6章では、水海道方言の格の範疇に関する素性がまとめられる。この方言の格の範疇は、統語的要因と意味的要因の両方が関与している。統語的要因には、連体修飾格であるか否かと、文法関係に関する素性（主語性、目的語性、斜格性）の二つがある。一方、意味的要因には、意味役割と有生性が関与している。

第7章「結論」では、本論文を通して得られた考察から三つの一般理論的意味合いが明らかにされる。

第一に、格の範疇を考える上で必要な素性には、統語論的素性と意味論的素性があること。第二に、この方言には、標準語では許されない二重対格構文が可能であるが、その理由はそもそも対格における有生格と無生格の区別という形態論的特異性に求められること。最後に、格の分類に関しては、分布格に基づく観点と形式格に基づく観点がともに必要なこと。

審 査 の 結 果 の 要 旨

日本語の方言研究では、音韻論や語彙の研究が主流をなし、統語論の研究はそれほど盛んでなく、少数の例外を除き、記述研究のレベルでも見るべき成果があまりないのが現状である。しかも統語論的研究といえば、いわゆる標準日本語を対象とするものが圧倒的に多いなかで、標準語と比べても格段に豊かな格形式と格体系を有する水海道方言を十全に記述し、その理論的意味合いを求めることには格別の意味がある。

第一に、本論文は、水海道方言の記述的研究という側面に限ってみても、特筆に値するものである。著者はとくに1994年から1998年にかけて水海道市と岩井市（水海道市の西隣の市）でフィールドワークを行い、60代から80代の「生え抜きの話者」のうち約30名を対象として上質の資料を豊富に収集している。その手法は手堅く用意周到なもので、それによって重要な新事実を数多く発掘し、既存の資料を補って余りある成果を収めている。

第二に、本論文は、方言の理論的研究としても、きわめて独自性の高いものである。著者は現代言語学、とりわけ生成統語論と言語類型論の方法と知見に精通し、多岐にわたる統語論的考察に基づき水海道方言の格形式の個別的性質、および格形式間の相対的役割を突き止めることによって、格体系の全体像を描き出すことに成功している。方言研究を、記述的研究の域を越えて、一般言語学的広がりをもつ理論的研究の域にまで引き上げた功績は高く評価される。

以上を総じて言えば、本論文は記述的・理論的両側面において本格的な統語論的研究としての熟成度が高いものと評価される。日本語の方言研究に新生面を切り開くだけでなく、将来あるべき方向をも明確に示唆していて、学界に寄与するところはきわめて大きい。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。